

第 11 回ラムサール条約締結国会議 COP11 参加報告

一般財団法人 北海道河川財団 企画部 川村 治
山本太郎

1. はじめに

2012年7月6日から7月13日までルーマニアのブカレストで開催されていた第11回ラムサール条約締結国会議 COP11（以下ラムサール会議）に参加しましたので報告します。



COP11 会場のルーマニア・国民の館。チャウシェスク大統領の時に建てられた。政府系の建物ではアメリカペンタゴンに次いで2番目に大きく、建設費はおおよそ1500億円と言われている。

2. ラムサール条約締結国会議

ラムサール条約は湿地保全に関する国際条約で、1971年にイランのラムサールで第1回の会議が開催されたことから通称としてこのような名称となっています。登録湿地数は世界で2,040、日本では新たに大沼や渡良瀬遊水地など9箇所が加えられ46箇所です(2012/6/26時点)。会議は3年に1回開催され、過去には第5回の1993年に釧路で開催されました。

本会議では参加各国での湿地保全の取り組みなどが報告されるとともに締結国における規約が審議されます。また湿地に関わる各種団体がサイドイベント、ブースで取り組みを紹介し情報交換することが慣例となっています。

私達は北海道開発局釧路開発建設部とともにブースで釧路湿原における自然再生の取り

組みをポスター発表しました。

ところで今回の会議で辻井達一氏（北海道環境財団理事長）がラムサール湿地保全賞（科学部門）を受賞されました。釧路湿原での自然再生の取り組みにも尽力されている辻井氏の受賞は釧路湿原の業務に関わる私達にとって喜ばしく励みとなりました。



ラムサール湿地保全賞を受賞された辻井達一氏。写真：釧路国際ウェットランドセンター齋藤さゆり氏より



本会議場。条約についての議題を審議している。日本からは外務省、環境省の担当者が参加しNGOがサポートするという体制となっているようだ。

3. ブースでのポスター発表

ブースは事前にラムサール事務局に発表概要などを記載した申込書を送り受理されたものに与えられます。ブースのリストを見ると、全56団体のうち、日本からは環境省、WIJ 湿

地保全連合、日本野鳥の会など 21 団体が参加しており、他国と比べて湿地保全に関する意識の高さが伺えました。



ブース会場 展示方法には各国の工夫が随所に見られた。日本からの出展が多い。ただ、情報交換は初日が最も活発だったようで我々が到着した4日目はだいぶ雰囲気が落ち着いていた。

ポスターでは釧路湿原自然再生事業の協議会のしくみと釧路湿原での現地視察の状況を説明しました。隣のブースで北海道開発局釧路開建が茅沼地区の旧川復元事業の紹介を行っており、その一連で釧路湿原に関心を持った方が立ち寄りという状況となりました。一例としてインドネシアの参加者とのやりとりで、

「協議会の中で野生生物はどこなのか？」

「野生生物という小委員会はないですね」

「釧路湿原に野生生物はたくさんいるよね」

「もちろんたくさんいますよ」

「でも協議会で野生生物の項目がないね」

「小委員会それぞれの議論が野生生物の生息の議論につながるのですよ」

「でも sediment (土砂) の小委員会なんて野生生物にはつながらないよね」

「・・・」

というのもありました。もっと上手な説明ができると理解してもらえたかもしれません。ほかでは、紹介内容が協議会のしくみという堅い内容としたこともあってか、内容に関する深い議論と言うよりは「日本に来たことあるよ」「釧路にも行きましたよ」「日本人は愛嬌あって好

きです」というようなお喋りのような会話をしていました。ただ、たとえ単なるお喋りでも日本や釧路に関心もってもらえることが大事と思って楽しい会話をすることに努めました。



インドネシアからの参加者と意見交換 生物の保全についてもっと認識を深めて、きちんとディスカッションできる必要があると感じた。



他国のブースで説明を聞く。民間企業のとりくみで積極的なアピールが参考になった。



マラウィの方にパネル説明 あまり細かなことよりどんな生き物がいるか、どんな保全の考えかなど全般的な話で理解し合えることが重要と感じた。



協議会について説明 ポスターはできるだけ単純でわかりやすいものにして、説明も単純にできるほうがよい。

4. エクスカーション

3日目は主催者によるエクスカーション（視察ツアー）に参加しました。目的地は **Fishpond Complex** というルーマニアのラムサール登録湿地の一つで、魚が飼育されている広い貯水池にヨシなどの植物も生育し、水鳥が多く飛来する場所でした。ラムサール条約ではワイズユースという基本的な考え方があります。自然だから大切に保全するというだけでなく、人間生活との共存として湿原をうまく活用しながら自然を維持するというものです。これは釧路湿原の今後の取組でも重要な点で、技術的に自然を再生する努力とともに、住民が無理なく協力でき利益をもたらせるような展開に知恵を絞っていくヒントになる事例でした。



エクスカーションは広大な貯水池へ。食用に魚が飼育され水際にはヨシが生え水鳥の楽園となっている。

ところでエクスカーションについては出発

前に届く事前情報が乏しく、ラムサール会議の公式サイトには「エクスカーションはホスト国の好意で参加者はみんな無料で参加できます」とあっただけで、会場に行くまで目的地や規模などはほとんど把握できませんでした。そして会場に到着してエクスカーションの申し込み窓口に行くと「もう参加受付は昨日締め切られました（！）」と言われてしまいました。それでもつたない英語で粘り、

「定員に達してないところならまだokです」

「ぜひ、どんなところがありますか？」

「ボルケイノ（火山！）」

「え！？（絶句）、

僕は川とか水のところに行きたい」

「Fish Complex というのなら空いている」

「それでいいです」

「じゃあここに名前書いて」

というやりとりの末にたどり着いたエクスカーションの貯水池でした。

5. 次回のラムサール会議に向けての教訓

○初日からの参加

他の日本人参加者の方に聞くと、ブースでの人の行き来や意見交換は初日が最も活発だったとのことでした。我々は日程の都合からやや遅れて到着しましたが、ブース会場はだいぶ落ち着いた雰囲気となっていました。他の参加国と活発に意見交換するには初日から参加するのが望ましいと感じました。参加日数も数日に限定するのではなく、できるだけゆとりを持って滞在し、じっくり腰を据えて参加するか、もしくは同行者を分けて前半と後半とにずらして参加するなど、誰かがブースに最初から最後までいるような工夫が必要だと思いました。

○ブース展示・ポスターの工夫

学会のようなイメージで、ポスターでいかに具体の取り組みを説明するかということを意識していましたが、世界中から「湿地保全」というテーマで集まる参加者の関心の対象は幅

広く、あまり細かな内容より、大きな写真と図で概要を的確に説明できるようにすべきと感じました。実際、字ばかりのポスターのブースはあまり人が立ち寄っている雰囲気がありませんでした。



ウガンダのブース 民族の織物、鳥の置物を吊るしたりと工夫がいろいろ。ふと立ち寄りたくなるブースづくりは参考になる。

またポスターだけでなく、国や生き物のイメージが湧くような小物を活用しているところも多くありました。ブースはまずは通りかかる参加者に関心を持って立ち止まってもらうことが第一でありもっと意識する必要があったと感じました。ちなみに同行した釧路開建の担当者は 100 円ショップで購入してきたという扇子を飾りにするという工夫をされていましたが、好評すぎて扇子自体をほしがる人が続出し、目を離れた隙に持ち去られたりもして、あっという間になくなりました。

○自主的な現地視察

主催者によるエクスカージョンは行き先が限定され、参加の可否も不明確となる可能性が高くなります。日程に余裕を持って、現地の特徴的な河川（今回はドナウ川など）を自主的に視察できるような出張行程を立てるなど工夫が必要だと思いました。

6. おわりに

今回、ルーマニアでのラムサール会議参加という貴重な経験をさせて頂き、関係各位に感謝申

し上げます。会議参加中に加え、資料作成など事前準備で得られた知識を今後の業務に活用していく所存です。

(2012/08/02 文責：山本太郎)